

神学校だより

March 2024 VOL92

日本バプテスト聖書神学校

JAPAN BAPTIST BIBLE COLLEGE



校長の机から

校長 斎藤 秀文

私たち石川県を含め北陸地方は、今年の日元能登半島地震という大きな自然災害に遭遇しました。そして今、多くのボランティアの人たちが被災地に入ってくださり、瓦礫の撤去、復興にご尽力をいただいております。そのような助けは、今、本当に必要ですし、これからも更にお願ひしなければならぬことかと思ひます。

このボランティアに来てくださっている人たちは、「少しでもお役に立てるならば、喜んでくださるならば、嬉しいでござる」と言ひて、真摯にその作業に携わって下さっております。また、他の人は「かつて私達も震災被害を受けた時、助けていただきました。その恩返しでござる。」と言ひておられました。本当に感謝しかありません。被災者は、ただただ受けるばかりでござる。

同時に私の心は、自問自答するのです。「私は、ヨハネ第一の手紙3章18節で勧められている『ことばや口先だけで』愛する者となっていないだろうか。あのボランティアの人たちのように恩返しができない私はどうしたらよいのだろうか。」と問ひてしまふのです。そのような時に、国内宣教委員会を通して、諸教会の牧師先生と兄弟姉妹からの主にある一方的な優しさと誠実な支援をいただきました。しかし私は、実に愚かにも、「では、この支援の対象はどのようなことに、またどのような人たちに対してすべきでござるか」と聞ひてしまったのです。私は、この諸教会の支援を受ける対象者に一定の基準を設けていたのです。しかし、国内宣教委員会の答えは実にシンプルそして簡潔でした。そのご返事は「教会に係る人たち誰にでもでござる。また、教会にかかわっているご家族、親戚に対しても」でした。金沢教会の隣人を選別せずに、必要とされる方がたが対象だと言われたのです。そこに何の資格も、制限もありません。

支援を受けた人たちは、驚きと喜びとともに、「私のような大した被害も受けていない者がこんなにさせていただいてよいのでしょうか。もっと困っている人たちがいるでしょうに」、ある夫人は、「教会員でもない私にまで、お見舞いをくださった聖書バプテスト教会に関わることができて私は幸せだと心から思いました」また他日、「まだ正式な教会員になっていない私が、こんなに支援を受けてよいのでしょうか」と言っておりました。

その時私は、農夫を雇ったブドウ園の主人が12時間働いた功績のある農夫にも、1時間の功績しかない農夫にも、その人の必要な分を与えたイエスさまの譬え話をお話ししました。この聖書の箇所は、よく聞かれるテキストです。そのたとえ話の主人は、「あなたの分を取って帰りなさい。私はこの最後の人にも、あなたと同じだけ与えたいのです。」(マタイ 20 章 14 節)と言われました。

神の国は、まさにそのようなところです。神学校の神学教育とは、まさに一方的な神の救いという恵みをいただいていることを証しするために、聖書を学び、そこに生きることを学ぶための学び舎でありたいと願うのです。



伝道実習の報告と証

実習先: 掛川BBC



小野 克 (4年課程4年)

主が祈りにこたえて、この実習全体を祝福のうちに終えさせて下さいましたことを覚えて、心より感謝しつつ、主の御名を賛美致します。

今回の伝道実習全体を通して、「愛する」ということについて深く考えさせられました。具体的には、教会に集われる方を愛し、また教会を探しておられる方々のことを愛し、プロジェクターやモニターや Youtube 配信を活用したり、外国語を利用する方々のことを配慮して、ホームページや賛美も外国語のものを準備することなど、多くの工夫をして、お一人お一人にお仕えしていくということです。

愛するということは、そのように、自分にできることをよく考えて、具体的に実践していくことなのだと教えられました。また、律法主義的に、相手を自分の考える型に当てはめようとしたりするのではなく、愛と忍耐をもって、お一人お一人と関わっていくなかで、主の御言葉と御霊の働きに委ねていくということについても教えられました。しかし、御言葉に委ねるということは、

何もしないということではなく、集われている方々が、より御言葉に親しみ、忙しくてもデボーションの時間を持つことが出来るように、毎朝御言葉のショートメッセージを配信するといったような、御言葉に仕えるお働きによっているということも、とても参考になりました。そのように自分自身を低くして、高いところから権威的に教えるのではなく、下から支えてゆくように、謙遜に、愛をもってお仕えしていく事が大切な姿勢であると強く思われました。

また、これまで牧会においてご経験されてきた、多くの事例や実情などをお聞きする事ができ、とても勉強になりました。なかなかイメージすることの出来ない現実の労苦や、困難な状況について知ることができ、自分自身、どのように働いていくことが出来るのかについて、思いめぐらす事が出来ました。特に印象的だったことは、信徒の方々との関わりや、経済的な面における困難さを、どのように乗り越えて来られたのかについてお聞きしたことです。教会でお仕えし、働いていくということは、何も問題が起らないことではなく、むしろ多くの問題を経験しながらも、主の御手によって支えられて、成し遂げられていくことであるのだと実感することが出来ました。また、そのように、多くの困難をご経験されながらも、これまで牧会のお働きとご健康が支えられてきたことは、とても力強い証であると思いました。実際に困難を経験することがあったら、榎本先生から教えて頂いた事を思い起こして、励ましを頂こうと思いました。

また、今回、榎本先生が、神学生との交わりや実習を楽しんでくださったという事をお聞きする事が出来て、とても嬉しかったです。夜遅くまでお交わり下さり、また

真面目なお話の中にも、楽しい冗談を織り交ぜて頂き、私たちも、多くの学びを頂きながら、とても楽しい交わりの時を頂く事が出来ました。この幸いな時を、主にあって、心より感謝しています。



三浦 基宣（4年課程1年）

伝道実習での学びの場を与えて下さった神学校及び掛川教会の皆様、そして神様に感謝します。

今回の伝道実習では掛川の小学校や中学校で「あいさつ運動」に参加しました。校門や下駄箱に入る所の手前で登校してきた小中学生に挨拶をして、手に持った旗の端にタッチしてもらうということでした。結構な生徒たちがそれに応じ、挨拶を返してくれました。また、その学校の教員方とも挨拶し、榎本師はこうした掛川の地での活動の中でキリストの香りを放っているんだなあと思いました。

掛川市民は祭を凄く大切に思っている人々だと話して下さい、その歴史と文化を紹介して下さいました。掛川では道路沿いからも茶畑が広く見渡せましたが、そのお茶について、茶道も体験させてもらいました。茶菓子を振舞ってくれた方との間で千利休がクリスチャンだった等の話が盛り上がり、最後には榎本師が名刺を渡していました。またその他にも掛川の観光地を回り、

掛川の歴史を知ると共に、この地での伝道の難しさというものを感じました。

榎本師の証から、掛川伝道は榎本師だから今までやってこれたものと実感しました。フェローシップの交わりにはなるべく夫婦共に参加した方が、つらい時でも自分を刷新出来るとのアドバイスが心に沁みました。また「海外ではコミュニケーションをとりたいという思いが大事」との事で、海外視察した時の写真を共に見ながらその時のコミュニケーションを取った成果をお話して下さった時には日本と海外の文化の違いを実感したものです。またパソコンやインターネットをどう使っているかを話して下さり、困ったら師に連絡をとってよいとの言葉には励まされました。

また礼拝ではエレミヤから「献身」と題して、「常に御言葉と向き合う、それが献身」との実感のこもったメッセージをありがとうございました。本当に、良い経験と思い出をありがとうございました。



オープンカレッジ概要



「神の創造と科学」

組織神学部門担当教師 白井 清之

昨年秋に行われたオープンカレッジの講義は、神学校の弁証学の授業に関連して「神の創造と科学」のテーマで、有神論的世界観と無神論的世界観の違いを踏まえつつ「宇宙論」と「生命論」の2部に分けて講義しましたが、その概要を簡単に記します。

1. 「宇宙論」

中世のカトリック教会の神学は、トマス・アクィナスに象徴される哲学と神学の調和を唱えるスコラ哲学であり、必然的に、中世の宇宙論は、アリストテレスが唱えた「天動説」を受け入れ、それが教会の絶対的な教義となった。だが、ルネッサンス以後、司祭であったコペルニクスは、天体の観測と研究の結果、教会の教義と反対の「地動説」を唱えた。続いてガリレオは、自然学と数学の融合を目指し、自身が発明した望遠鏡を使い詳細に宇宙を観測した結果、「地動説」を裏付ける論文を発表した。彼の学説は、カトリック教会の反発を招き、ガリレオ裁判へと発展し、彼の主張は、教会の権威と圧力によって封じられた。その出来事は「科学と宗教」

の対立を象徴する事件となったが、それは、科学が聖書の誤りを証明したのではなく、教会が哲学と神学の調和を試み、聖書の上に独断的な教義を立てたことに起因する。ルターは、原語から聖書を紐解く事でカトリックの聖書解釈の誤りを正し、ガリレオは、自然界の法則を実験と観察と数学的な方法で証明し、その誤りを正した。

17世紀にケプラーやニュートンなど天才的な科学者が、宇宙の運行の原理を数学的な法則によって解き明かして行く。特にニュートンは、「物体の落下」などの原理を「万有引力の法則」により、「地上の物体の運動」と「天界の星々の運動」を統一的な運動方程式で解明した。彼の運動方程式は、やがて大陸の合理主義的哲学と結び付いた時、神を自然界から排除し、宇宙の法則こそ絶対であるとする決定論や理神論的世界観へと変質して行った。一方、科学の発展は、宇宙論などマクロの世界から電子運動などミクロの世界に移り、クーロン、エルステッド、ファラデー等の科学者が、電子や原子などの運動方程式を解明して行く。マックスウェルは、ファラデーの実験結果から「電磁場の運動方程式」を導き出し、電気と磁気と光を統合する普遍的な自然法則を見出した。

更に、20世紀にアインシュタインの登場によって光の原理が解明され、彼の唱えた「特殊相対性理論」「一般相対性理論」によって、光速の運動下において、時間さえ伸び縮みし、時空も歪むことが証明され、結果的に、この宇宙は、永遠普遍の存在ではなく、時間と共に収縮や膨張する事が証明された。フリードマンは、アインシュタインの方程式を解き、「宇宙膨張論」を唱え、ルメートルは、ある一点から宇宙が始まったとする「ビック・バン理論」を唱え、それがハッブルの観測結果によって実験的に証明された。

確かに、科学は宇宙の始まりを証明したが、「何故、宇宙が存在するのか」の疑問に答えられず、それは永遠にできない。科学は、世界の内側での斉一性を探究しても、世界を越えた超越的な存在者について何も証明できない。それは、神の存在を前提にしなければ説明不可能である。「初めに神が天と地を創造した。」神は、神の栄光を現わすためにこの世界を創造された。従って、科学は、神の創造を前提にしなければ意味を持たない。たとえ科学者が神を否定し、科学で自然界を探究しても、目に見えない神や、人間の魂や、魂の行末など何も解明できない。

「事実、この世が自分の知恵によって神を知ることがないのは、神の知恵によるのです。」(Iコリント1:21)

2. 「生命論」

生物学の発展は、宇宙論と異なり、初めから「神による創造」の概念と対立的な姿勢を示した。

ダーウィンの進化論は、生物学のみならず、今日の科学と思想に多大な影響を及ぼして来た。生物学者リンネは、神による創造の秩序に由来した生物の分類体系と「種の固定」の概念を提示したが、ダーウィンは創造論に異を唱え、「種の起源」(1859)を発表し、「生物は下等なものから高等なものへと進化した」と唱えた。ダーウィンは、「地球が長期間の歴史の中で斉一的に形成された」と唱えた地質学者ライエルの影響を受け、それを「生命の発展の歴史」に置き換え、神の創造によらず、自然界に「生命の進化」の法則を適用し、それを「自然淘汰」と「適者生存」(環境に適応した種は生き残り、そうでない種は駆逐されるという原理)で説明した。彼の学説は、英国で大論争となり、それ以降アメリカの「スコープ裁判」など「創

造論と進化論」に纏わる論争の発端となった。進化論の特徴は、「種の固定を否定し、自然淘汰と適者生存の原理によって進化する」「生命の発生と進化は偶然によるのであり、神の意図などない」と考える事である。

今日、最も先鋭な進化論者は、リチャード・ドーキンスで、「盲目の時計職人」や「利己的な遺伝子」等、多数の著書を執筆し、キリスト教の創造論に敵対的な姿勢を示している。講義では、その無神論的進化論への反論を試みた。まず、「生命とは何か」を論じ、生命は、人間の作る高度な機械など及びもつかないほど精巧で複雑な機能を持っている。生命の特徴は、どれも自己複製する事で、人間には、自己複製する機械を作ることができない。科学者のノイマンは、仮想空間上で自己複製する機械の仕組みを考え出したが、それは、後にワトソンとクリックが発見した DNA の仕組みと瓜二つであった。自己複製機械は、設計図と万能組み立て機械によって成り立つが、生命は、「ノイマン型の自己複製機械」と言える。生命は、DNA というデジタル化された設計図に従って、アミノ酸を一つずつ結合させたタンパク質を作り、それが細胞組織となり、それぞれ生命固有の機能を持った組織を作って行く。生命の起源を説明するには、この複雑なシステムの起源を説明しなければならないが、ドーキンスを含め無神論の科学者は、その起源を全く説明していない。それが偶然にできる可能性など全く無く、それは、可能性や確率の問題ではなく、知的な存在者（神）の意図と業を前提にしなければ不可能である。

現代の科学は、生命に備わる神秘と謎に満ちた固有の機能や習性などの情報の起源を何も説明できない。部品をデタラメに配置しても機械が作動しないように、生命が偶然に生じる可能性は全く無い。オパーリ

ンは、実験的に生命を造り出すことを試みたが、生命の原型である細胞を作る事さえできなかった。それは、今日でも同様であり、未来永劫不可能である。カウフマンは、進化論者に共通する考え方である「生命が自己組織化によって生じた」と考えたが、「自己組織化」は自然を秩序付ける人格的意志を持つ知的存在者を前提にしなければ成り立たない理論である。「自然界が偶然に出来た」と考えるには、余りにもうまくでき過ぎている。それは、宇宙論と同様の事が言えるが、科学が生命の核となる DNA の仕組みを解明できても、「何故、そうなっているのか」を誰も説明できない。人間は、人為的にアミノ酸やタンパク質さえ作り出せない。DNA や細胞の起源は、全て神の創造を前提にしなければ説明できない。ドーキンスは、「自然選択が生命を生み出した。」と言うが、彼の信念は、何の根拠もない、勘違いである。

進化論は、ダーウィンがガラパゴス諸島で観察して示したように、種内での進化を確認できても、“ミッシングリンク”のように種を越えた進化を証明できない。それは、未だに仮説の域を出ていない。進化論は、適者生存の原理を中核とするが、神は、あらゆる生命が環境に適応でき、存続できる知恵と機能を備えられた。自然界は、自然淘汰と適者生存の原理ではなく、むしろ、生命の共生と自然界の調和や秩序で保たれている。

「ああ、神の知恵と知識の富は、なんと深いことでしょう。」（ローマ 11:33）



受講生の証



「オープンカレッジに参加して」

高木 弦（滝山BBC）

テーマは「神の創造と科学」（前編・宇宙論、後編・生命論）で白井清之先生（希望の丘聖書バプテスト教会牧師）が講義された。

膨大な資料を基に、前編の宇宙論は天動説と地動説から始まり、神の御言葉と自然界の成り立ち（宇宙の始まり）を話され、後編の生命論は創造論と進化論に関して生命の神秘について、講義を昼食をはさんで受け、重いお話ではあったが、私にとっては興味あるお話で、先生のご講義が私の思いと一致していて、とても嬉しかった。主の恵みを感じ、主を賛美し感謝した。

そもそも、私は科学を学び、化学の小さな研究者として、また教育者として歩み、実証を重んじ、聖書の御言葉を信じることが出来ずに50数年間を無駄にした。しかし、聖書の創世記1章を通して、なんと素晴らしい科学的自然界の創造が聖書に示されている事に気付いた時、神に脱帽した。聖書は科学的な書でもある事を知らされ、神が創成された全ての世界の事柄を私達に追究してみなさい、と科学者に手招きしていると思われてならない。その様な事にも気付かないお粗末な科学者としての私の証しである。

白井先生のご講義の中で、宇宙の創成と

生命の誕生は神の御手で行われた業と作品である事を先生から教えられ、私の聖書からの学びと一致出来た。

前編の宇宙論では天動説と地動説から始まり、コペルニクスにガリレオ、そしてニュートンやアインシュタインと歴史を追って教えて頂き、更にホーキングから現在に至るまでを詳細に語られ、神の業と現代科学についてご講義を頂いた。現代の宇宙物理学者でさえも宇宙創成の出発点は分らない、と言う。宇宙の創造にジョージ・ガモフの「ビッグ・バン理論」がある。極小さな、小さな空間（宇宙？）が半径1センチ位に膨れ上がった時（ビック・バンと呼ぶ）の前に何があったか誰も解ってはいない。神の創造の業である。

後編の生命論はダーウィニズムから講義が進んだ。ダーウィンと言えば創造論への挑戦、進化論に話は展開する。ノーベル賞受賞者野依良治先生によれば、ダーウィンは「地球上から多くの生物が消えていったが、決して強いもの、賢いものが残ったのではない。進化を遂げ、新しい環境に適応出来たものだけが生き残るのだ」と語った事を紹介している（RIKEN NEWS 新春特別対談2010）。ダーウィンは、「いのち」である種の創造（起源）を語ってはいない。

「生命は人間の作ることのできる機械ではなく、それは神によって創造された神の御業である。詩篇24章1節”地とそれに満ちているもの、世界とその中に住むものは主のものである”（白井先生の資料より）」。はたして生命は何か、生命の誕生は科学的には説明できない。神はこの世に生命を創造されて人間を誕生させる為に素晴らしい環境を準備された。そこに神の愛が示され、神に似せて人間を創造されたのである。（創世記から）

全ての動植物は細胞（生命体とも呼ばれる）を持つ。現在の科学では「光」によって素粒子が生成し、それが原子になり分子となって物質が生成されたと説明されている。この「光」とは聖書の創世記にある神の光「栄光の光」であると私は確信している。全ての物質の生成は神の業であり、「全知全能の神がこの地上の生命のシステムを叡智を持って造り上げ、それを維持しておられると信じている。物質を形作る原子やそれを取り巻く電子や、その結合によって新たな分子の形成にも神の叡智による配剤があった（白井先生の資料から）」、これは神の創造の御業で、我々に対する神の愛である。聖霊の働きを通して今も神の愛が注がれている。この講座を通して白井先生を通して神の恵みを頂戴した。感謝！

「天は神の栄光を語り告げ、大空は御手のわざを告げ知らせる」（詩篇 19：1）。

在校生一覧

- 4年 小野 克（出身・奉仕：港北）
 3年 池側 真紀（出身：茨木、奉仕：稲毛）
 2年 渡邊 剛志（出身・奉仕：船橋）
 1年 岡戸恵里也（出身・奉仕：船橋）
 三浦 基宣（出身・奉仕：高槻）
 (W) 金原 史佳（出身・奉仕：清水）

（2024年3月現在）



～ 編集後記 ～

先号から少し間が空いてしまいました。秋期講座（講師：鹿毛愛喜師）の概要と証は、紙面の都合で次号に掲載の予定です。次号では3名の新入生を紹介できることも主にあって感謝です。ところで今年の秋の伝道実習先がまだ決まっておりません。土日を含めることもできます。受け入れが可能な教会がございましたら、神学校までご一報ください。何卒よろしくお願いいたします。（三谷浩司）

神学校行事日程

2024/3/5（火）

● 入学考査（第二回）

2024/4/1（月）

● 第70回入学式

2024/5/21（火）-24（金）

● 伝道実習（若葉BBC）

2024/7/11（木）

● 卒業カンファランス、卒論発表

2024/7/12（金）

● 第65回卒業式、同窓会

（会場：小諸市民交流センター）

発行：日本バプテスト聖書神学校

〒389-0111 長野県北佐久郡軽井沢町
 大字長倉 4696-27

校長 斎藤 秀文

TEL: 0267-46-4689

FAX: 0267-46-5203

Eメール: jbbf.jbbc@gmail.com

ホームページ: jbbc.jpn.org

郵便振替: 00180-1-700102